



大内  
十杉傳 第三輯

卷五

秋  
202  
10

18  
202  
10





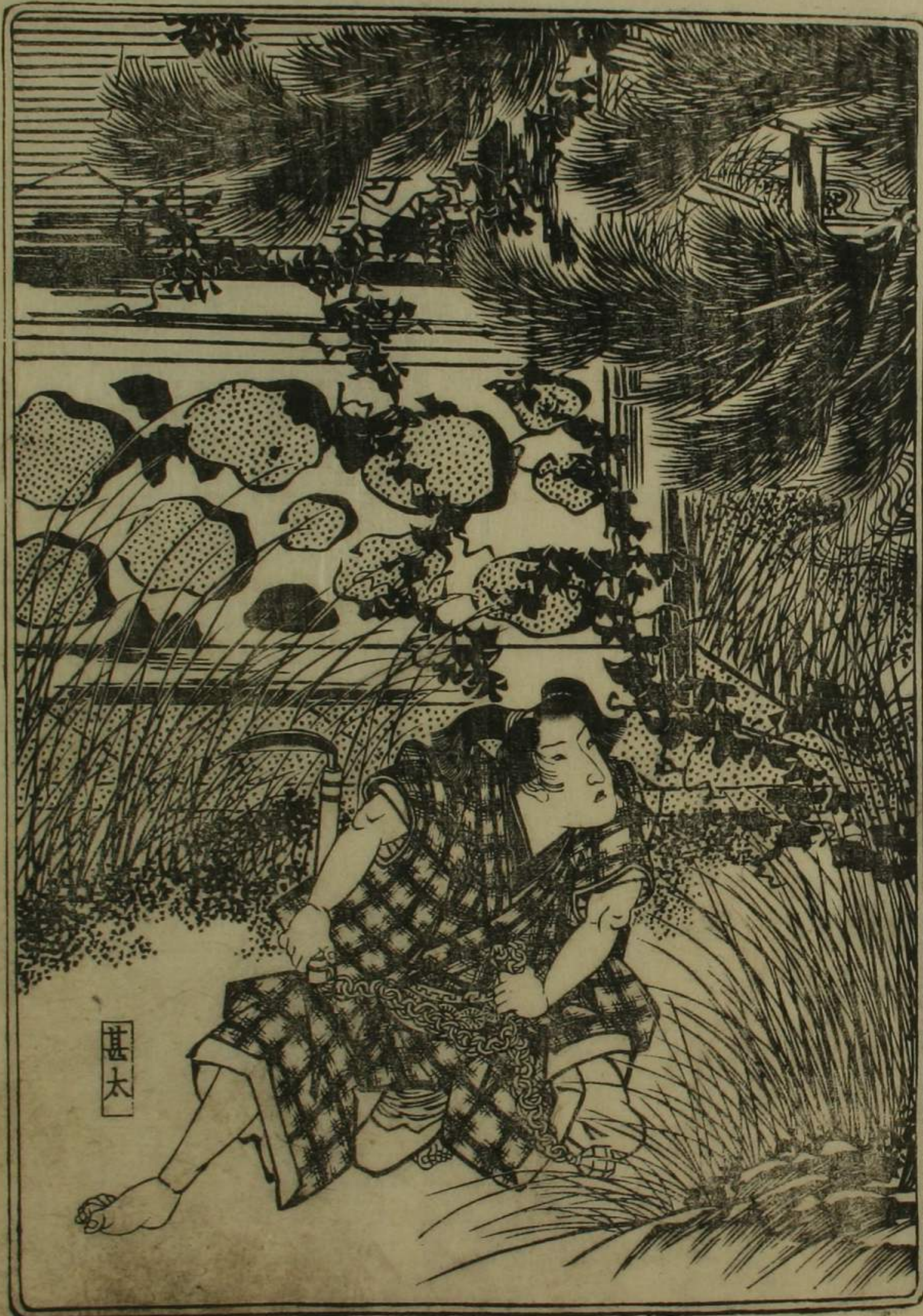
朝臣の主従退治のひ丹波の国を酒類が類ひつゝわねども民の国土の山をぞと  
 悩ます癖あるれが時日と長まれば退治し世と静謐ふるまんとぞと各の脅力小の  
 らでハ驅んまぬも守も近た小人夫と催して弓矢その他獲物と持此處彼處に隠す  
 居り得りやとあらば四方よりおどり亀魚も蛇も蛇も討ち其区を知覺  
 松へ言えんは必らむ賞のへて末代までも此邑の美名と遺さるるまばるる粉骨と  
 さね飲但も其他のもたれ計策のあつるまばるるまばるるまばるるまばるるまばるる  
 勢いそら嘯たう人ね鷲の大樹小羽の体も燕雀と白眼如く小向測る人とな  
 下と莊官可平いふゆと問かむ此處に集ひ人々が先輩後輩の差別あり余も如く  
 此裡ハ世間のいと騒がしく解取た夜はさるる莊官許の命を通果く退治  
 るる物もらまにまた幸とるる也衆皆愚拙の者もは是等の大美多く小斯見え

といふ思量あり。ぶきもせよ莊官の下知と守りゆゆえと異口同音に言はゆぞ  
 可平完尔とさすもこそあは各力とまきばとも疾知驟許へ招へまらまら官府よりして  
 忽地小平らびゆえハ疑ひるまらどかむりの夜置るる許へあむゆも及が仕用  
 人々一致のふと斯言さる何ぞら人の功と奪へずもまきまは此處ハうもまきまは  
 いふといふ此變化ハ夜又飛天の所方ありまきま猛獸の所方まきり何まを定め  
 かくまきま夜又飛天ハ佛説よりまら名小く俗小ふ天狗小ありと博識人小  
 まらまらまらまらまら猛獸の所方とまらまら尋常の狐狸樛鹿の類ゆまら  
 まら疑ふらハ狨猴ゆもあまら猿五百と徑く獲とる獲ハ牡のこめて此のま













詞の端の訝うき仔細であらん甚太め只管血氣も早うら。怪々ね夏のみ  
 らは跡後巡り人よ笑ひきあるともみぢぞ耳を澄して對居るに莊官只ねら笑ひ  
 是甚太く空ね今日衆人と招けしもまて你らも争論もよき此を田畑と  
 荒し人と傷み変化のこも是ぞ除く此村ハ戸ざね世の泰平樂飽まで食  
 腹飽老の糸の長分不足踏伸と寝らねど人の雅式ハた此一事你ま  
 しく老父の基業を嗣んとるらバ彼変化還治さるてから戻も何ぞ不隱  
 住るりや。在家なるも入届けし。さきまバ此功莫大るらん。此夏往昔の渡  
 邊源吾個がど心操ふあらむんバ。其功と遂ごらん你心々剛ありども夜  
 中の独行物凄き原野江海墓所並木と巡りつむと雅々。きりきり人々  
 寄集ひ歩行どた々盃物も怖まき只管濤ひ。さきまバ勞く功多事こ

たが独り。其在所と探りゆると空より早く居丈高も眼と怒ら  
 牙と嚙嗟心々。莊官よ吾まて廿歳ふ至らばと。此は悔もあ。假令つる  
 変化もありとも。徒搏ふる夏易く。今より三日之間と許さハ必らど功と頭  
 言ふ。此のぞ知らで怪あるせと。咳くと甚太ハ各口と動じある。人々  
 怖る鬼魅妖怪と徒搏せんと。莊官も学々。回答とせん。此は父  
 実作ハ余りの夏も。白眼の物さ。莊官可平扇と披さ  
 こそお目。你詞の如く。吾まて。既も救済の評人あり心と  
 責く功と。膝ま。甚太が白と守。甚太ハ完亦と笑。変化と  
 把る夏仔細。貴容の詞野も差へ。衆人と。実作

把つかくこと久も帰かへるとは実作しやく筋しんふらち對ひ。うらるれが斯大だい膽たんるる。莊しやう官くわん許きょが今日けふの口くち演えん全ぜんく汝と筋きりて。変化へんげの在家あやうと密ねさせ。深ふか夜や小せう独どく行ぎやうさとうらら。  
 猛まうに獸小せう傷けうならうら。但たゞく変化へんげ小せう出しゅ會かいて忽地ち命めいと把おらう。二にの外小せう出しゅらうらむ。さま目めが変化へんげの身と借く汝と殺し吾がまと年老ねいとれが餘命あまは此家け。  
 退たい博はくるんとたち。世よ々此村むらの莊官くわんと威と震ふべた計收しゆらう。怒いか々渠小せう載さいらうとて危あま危まとさううと老らうの一圖いつ小せう住ぢうむと甚お太た々々うらちわらぬ。我われ々々のままま。  
 勞らうの多ひそと六十じゅう小せう余あの身とおたとえう。身み邊へん達たつの便とるともさらうりの。  
 危あま危まとさううと幸さいでう足あしと容べまさう。吾われ此こゝ小せう過かある時ときハ必ず老と養ふべた便のたち吾も知らう。庄しやう官くわん小せうの言票げんといふますて。ゆめくらうのと止まるる。氣き色しきもあらざらば。実じつ作しやく今けふハ住おらうらうら。漫まん真しんとく此こゝ。

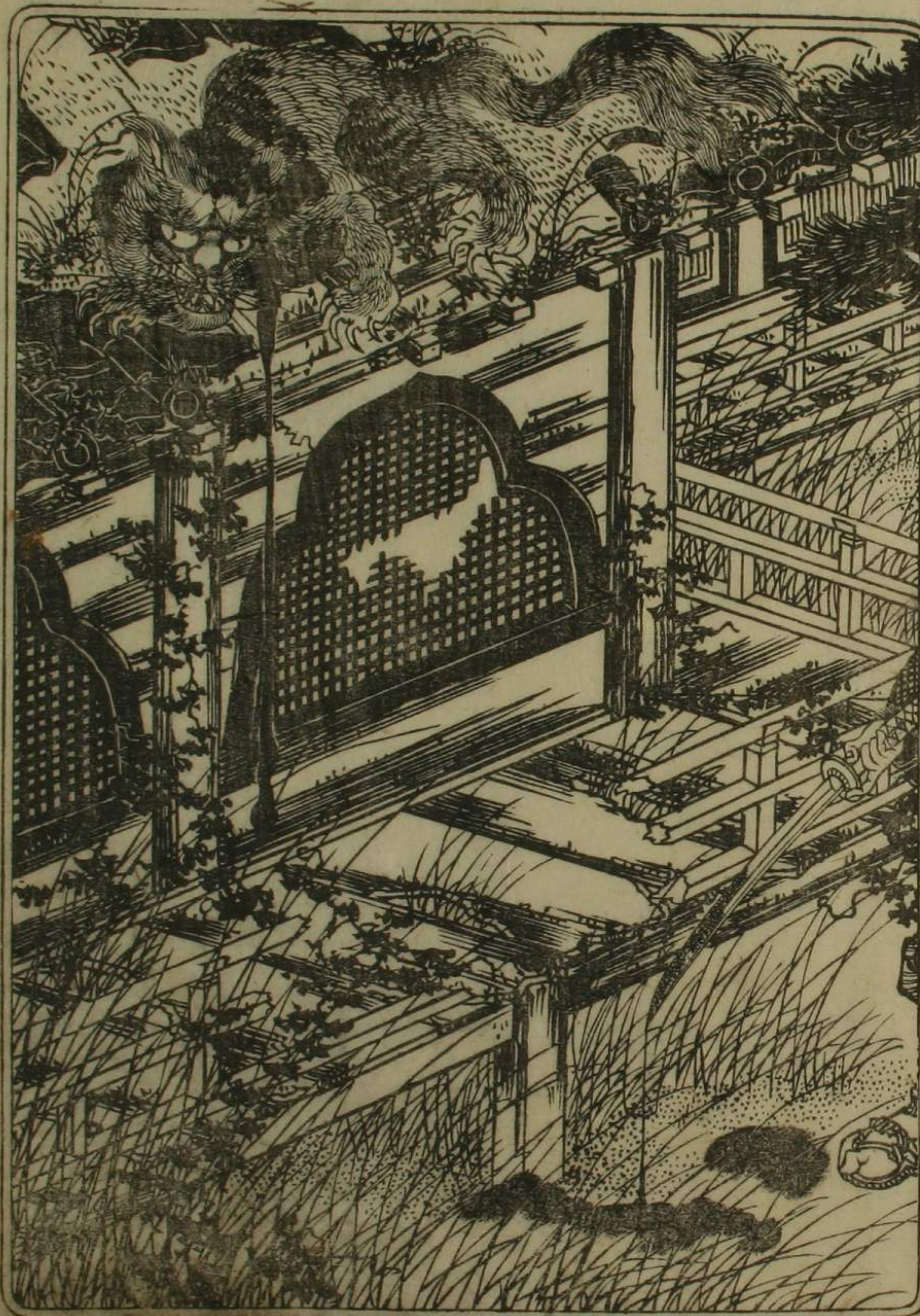
父ちち小せう敷しきるんひそと曉らう。棚たなあるる刀やいばの管子くわんりわく中よりおと短刀たんと甚太た々々前まへ。  
 小せう閣かく々々吾われ家けの什物しつぶつゆく。世よも稀るる名な刀やいばのり。委またちの困暇げんのとり。  
 語ことうとは甘んんは佩く過るる心こゝろと着ねと今けふふらぬ慈父ちちが詞甚お太た々々ハ是とおく戴た目もや。西にし小せう傾かへまる。喃なん爺やは淋くも。今けふ賢けんハ独寐みまりあといひく握にぎるる粟あわの飯腰こし小せう着きてぞ出いでらいね。

第三十回 勇士奮撃知旧好

かく甚お太た々々家けと出らう。右みぎさら左ひだりさらぬゆの廻さう。小せう所しよ謂い変へん化げの事あらわば其その居い所しよ。  
 さまも定らうらむと今宵けふつらく出まさるも量りやうつらく出まさるも。若わかし命日めいまさらん如何いか甘あまんと其その死し等らう此こゝ死し等らうと踏躑しつしゆが道ぬく人ひとの高声たうせい小せう物ぶつ語ごつと不ふ圖とハ此所こゝハ變化へんげの身と四方しやう邊へんの風流ふうりゆうあり。そハ彼妙めう美びの林麓りふるる。幻まぼろし空くう寺じの奥。

山と栖とるく夜みくハ往来の人と感ころ。まこ作物と奪ひさる。此程ハ薄暮より。妙美の麓の往還ハ旅の人と止絶ころと語らる往と甚太ハ定てもぞ世小の燈臺の。元暗き踰ふあり。真偽ハ計と知られ共彼幻空寺の山奥ハ古なる石碑或ハ塚と墓も後へ覆り。荒らるまの古寺るねハ何さる女魔の栖もいふに彼処の客も且大く疑ひあはるる。と夫より頭と廻ら。妙美の麓へ至り。幻空寺の門とる頃ハ夜も亦初更の頃あり。松明の準備もあらざる。樹立障るハ奥庭と圍もくゆけ草深く。木の葉埋も深雪不似り。蝙蝠左右小飛る。大樹と流る風の音騒々しく肌を融く。慄々として凄まじく此の毛も。とらむれど心剛なる甚太る。且豫て雪之。彈鎌腰よけを投りて逆手に握り左と伸。その往先と探る。猶小

奥へいりて不折も暗の古なる。物の善悪も分たれど樹木亦茂る。て天と覆る。星の光ももる。夏魚いど苔滑小足小泣む。やぶまに運ぶが。漸々中々古塚の苔生ら。に探りあて墓坐小腰とらちかひく。其夜のうらを待居り。まの遠説活休題松枝の驛の騒動小呻吟出。茂平が女兒小雪ハ老女に引ら。阿千賀とて。いふ。如何ハせん。と嘯道彼方此方とゆれ。巡る。黒烟天と焦とるね。その明き。真畫の如く。途行人と定ふ。る。逃呻吟る人の裡。夫と。老女あり。衣の。紛る。小雪を跡より足たやに嘯。と。刀自。待。小雪小作り待。と。響。さ。さ。一條る。田の面の道と喘。て。ゆ。わ。家刀自。吾。と。一。薄倒。耳。と。一心。走。往。嗟。於一段の。張



杉坂藏人

小雪  
 妖姫と  
 英雄の  
 危婦  
 先

あが。鳴。わ。老。女。ハ。此。方。と。り。む。た。小。首。傾。け。右。視。左。視。ま。ま。一。叢。小。走。り。ま。る。く。圓。の  
遠。小。十。及。あ。ま。り。隔。て。一。む。ら。小。其。自。の。定。る。る。わ。が。小。雪。ハ。心。を。回。り。頻。り。と。急。ぐ  
わ。が。路。哉。于。と。う。走。り。ま。る。左。右。ハ。松。の。並。木。中。々。家。も。回。遠。小。里。遠。り。左。と  
り。わ。が。小。高。た。岳。小。さ。る。石。の。地。藏。と。安。置。其。傍。中。々。一。樹。の。松。枝。も。覆。ひ。ま  
み。百。年。と。経。ふ。え。老。樹。ハ。將。小。こ。じ。性。昔。の。一。里。塚。え。り。右。の。遠。小。樹。ま。り。  
原。野。の。薄。眼。と。透。る。仰。向。た。つ。小。輪。塚。あり。小。雪。ハ。此。処。へ。来。り。と。凄。々。怖  
さ。小。氣。も。真。岡。少。く。も。早。く。連。行。く。俱。小。往。ん。と。急。と。揚。々。喚。さ。り。は。く。走。る。程。小  
猶。く。中。々。あ。の。つ。ま。ね。小。雪。ハ。老。女。が。袖。と。の。胸。を。叩。く。喃。刀。自。了。付。發。ま。り  
足。の。早。く。在。と。妾。ハ。わ。く。辛。く。果。る。何。と。目。當。ふ。斯。を。り。急。ぎ。あ。ま。り。千。變。松  
や。ま。ま。と。處。女。も。遭。ひ。の。く。く。と。急。く。振。り。老。女。ハ。ち。ち。笑。を。自。ま。り。寄。て。ま。り。と。

小。雪。と。り。自。が。此。方。も。ぬ。ま。や。家。刀。自。と。の。外。こ。ま。人。差。へ。ふ。こ。ま。の。な。れ。  
許。さ。せ。多。く。老。女。も。刀。自。ハ。何。方。へ。往。き。や。何。人。が。り。ま。心。許。る。喃。此。処。に  
何。方。中。々。何。と。い。ふ。所。ふ。あ。る。や。松。枝。も。何。計。の。道。法。あり。と。素。直。に。老。女  
ハ。独。り。も。意。深。傳。い。お。身。ハ。旅。人。中。々。彼。松。枝。の。駭。動。小。呻。吟。せ。り。連。と。せ。り。  
人。と。い。ふ。く。い。の。い。う。速。莫。被。処。ま。り。大。丸。一。里。も。あ。る。ま。り。七。滿。の。頃。及  
る。見。よ。り。歸。る。の。い。ん。中。々。路。ハ。ま。ま。と。真。夜。中。る。五。吾。僧。と。母。の。こ。い。差。へ。り。  
逐。る。い。も。過。世。の。縁。吾。僧。ハ。此。処。る。臣。の。内。中。一。個。住。の。寡。に。あ。る。わ。が。何  
ん。苦。し。か。る。ま。ま。今。宵。ハ。俱。小。吾。家。小。休。を。夜。あ。り。彼。処。と。探。り。ま。り。あ。り。  
尋。ね。あ。ら。ざ。り。と。彼。処。小。宿。と。合。甘。く。の。ハ。と。急。と。捨。る。小。難。色。呻。吟。せ。り。  
その。ま。る。ハ。世。小。も。良。ま。り。と。急。と。亦。見。此。等。の。ま。り。心。細。く。五。吾。僧。



採領を其さる元ハさりめだ。伽藍中もあり小久ん。いりう斯も思く。  
 狗狸小あらざり廿六。此奴小住べくる。なにか心地気も消心裏何々  
 せん。とまぶ。且で胸のそ。小踊る。進退の術る。折ら。傍の壁の  
 直落と。鳴不駭。其。其。其。二八斗りの美少  
 年小雪と。招く小雲。嗟と叫び倒れんと。抱た。由て  
 いと長。小雲が。頬のありと。夫。小雲  
 心に。嗟と叫び。把ら。と。拂ひ合破と  
 伏せ。抱起。少。容形。小。の  
 一文。自ら。画。虎。小。と。虎。小。月。百連の  
 鏡の。狼。鬼。左。右。逆。口。耳。で。紅。の。舌。出

一口小食んと。威勢。小雲ハ心に南無弥陀佛。南無弥陀如来  
 と。念。亦も合破と。伏せ。変化。魚。其。板。其。と  
 踏鳴。音。百子の。雷。一回。小。如く。胸。小。又。腹。小。音。怖。了。真。喻  
 する。小。物。折。折。表。の。さ。も。茂。大。木。の。暴。に。慄。び。鳴。を  
 り。其。音。板。と。裂。少。と。大。石。と。縛。と。如。小。雪。ハ。さ。ら。に。心。折。る。  
 果。敢。る。露。の。身。の。今。や。消。んと。覚。悟。し。其。処。伏。折。る。あ。ま  
 此。次。の。間。と。覚。了。方。に。教。子。行。る。盤。石。を。縛。落。さ。如。く。の。音。王  
 なる。声。ハ。天。地。小。滿。叫。び。狂。へ。る。動。静。あり。こ。も。ま。と。吾。と。威。さん。と。か。る。声。音  
 と。や。つ。や。喃。怖。や。肝。ど。の。冷。さ。せ。ど。も。疾。殺。せ。生。中。息。の。あ。い。と  
 音。も。空。内。怖。も。増。え。死。る。る。多。く。せ。せ。と。ん。も。せ。せ。心。易。かり。と。

他と聞へくも詮方なく。雨の杖と頭ふあて。血と屈めく潜る馬りに物もど  
 忽地静ふるり。と。肅然たる風の音の。外中を聊音もる。傍に明るに  
 むど近らと。バ。妖怪頭ふ立退し。嗟嬉しや一命の漸く恙るれ。と。漫  
 然びおそく。頭と擡げく。く。足直バ傍の壁の壊れ。同し。松明の光の  
 繁然たる。く。く。訝くや。是も。と。變化の所。鬼火。と。於怖し。く。く。や  
 増ぶ。亡命。る。り。の。と。つる。物。く。く。と。ら。の。く。く。積。く。其。処。へ。這。出。る。の。  
 容と何。バ。廿。某。斗。りの。健士。が。玉。き。る。斗。りの。大。太。刀。と。血。に。滌。く。と。左。に。  
 松明。より。照。く。其。処。等。此。処。等。物。と。密。り。動。静。あり。小。雪。ハ。つ。く。訝。く。く。  
 是も。ま。と。妖。怪。く。と。心。頻。り。に。裏。け。と。れ。渠。が。乃。様。と。ら。ん。泉。と。ん。と。小。産。小  
 か。く。ま。く。何。の。屋。に。彼。氏。士。ハ。統。松。と。ら。ち。り。く。此。方。へ。若。り。か。て。く。如何

る。ら。と。周。章。て。急。ぎ。逃。ん。と。さ。る。間。も。あ。ら。せ。ど。踊。り。か。り。解。く。帯。と。懸  
 と。踏。ま。人。己。と。逃。る。と。く。逃。る。と。べ。た。る。抑。吾。と。誰。と。ら。く。四。海。の。裡。小。其。勇。名。隠  
 と。あ。ら。さ。る。杉。坂。藏。人。武。者。修。行。く。法。国。と。徑。歴。今。日。山。所。と。通。か。る。小  
 薄。暮。ふ。お。て。ん。で。旅。店。る。く。僥。倖。是。る。荒。寺。も。野。宿。ふ。増。と。お。り。く。ら  
 此。処。ゆ。く。一。夜。と。明。さ。ん。と。眠。る。や。否。種。々。の。怪。異。と。な。り。て。湯。く。と。徹。令。悪。冥  
 鬼神。ふ。あり。と。も。怖。る。べ。た。少。あ。ら。ね。ど。此。妖。怪。と。ま。の。ま。お。バ。君。の。人。と  
 傷。る。ん。是。等。の。者。と。仕。留。れ。こ。そ。武。者。修。行。する。甲。斐。も。あ。ま。と。眠。く。く  
 体。ふ。款。待。て。近。る。所。と。一。刀。定。く。ふ。子。養。父。首。尾。全。く。と。夫。庭。に。投。を。明  
 松。の。光。り。ふ。ん。は。バ。救。ま。の。血。の。と。滴。り。その。影。ど。も。も。く。く。不。測。ら。く  
 漏。く。る。殘。念。さ。ふ。探。せ。バ。這。回。ハ。色。く。た。女。子。小。打。扮。て。我。も。吾。魂。と。迷





杉坂藏八

勇士 闘



甚本

扶魔 魁 健兒

さんとする不敵の癖者ぞく正縁と見えざるハ真甲梨子割唐竹割  
てハコトせぬぞと罵つて昇りて又とつりあぐまバ小雪ハ嗟やとどび除つ  
努々妾ハさるのるらむ此処許してと言せむ敢て執念妹怪まど陳ぶや  
其知る動もそ此世のいふ把らせ呉んとつり廻ると又の光と散徹し  
くま多碎けゆく稲妻の昇りて如くふくふれバあまんとと氣も顛倒左  
へ飛さり右へわひ片膝まきハ此と反せ命と際と逃呻吟藏人ぞ容  
とんぐ血刀其処へ突立ち汝ハ誠の人なりや若きもあらバ何とて人跡  
絶ゆる此処小居るその訳語と松明と白の傍に又さくおせバ小雪ハ  
覆ひ袖ととり涙と拭ひく曩に和君が姓名と答り妾が此の上と  
ぞく昔とんとあぐま其障るなといふせん妾ハ小雪とや侍り素生ハ

あつく此所へ来りし所謂ハ這般とと始終落る語ふるん藏人ゆくと  
左もありし夫とぞ知らず執念も変化が容形と換とせぬ殺さんと世  
いと死さよ其往されこそ定うるね雅き時小別とる妹が此の成行  
まもぞ六此身の僥倖あり殊小美茅の杉谷妾門ま杉倉伴作まで  
因ありぬる汝とハ夢ゆとも知らざりし名程もる夜も明るバ伴ひ  
諸共小松枝へ立越とその人々が往方を索ねん危ふりしと驚歎して小  
雪と痛て東雲をちむとまら住く小雪と俱して立去りおと小甚太も  
青塚の元小狸とありらるが其夜世満と雪を了ん頃一團の火赫と燃忽然  
ととく一個の勇士頭ハまき飛鳥の如く小甚太が頭と丁と蹴る甚太焦燥  
と把えとまると亦も丁と蹴るうた消を如く飛失る甚太ハさらば



# 順補丸

此丸をどうするものか 小半削入百千四銅

- 第一類のうろ黄をみむくとき足表はみほふ
- 息を吐く下くあみみくく胃をみくくあみみく
- のどに氣をさすうろく寝るあみみくくあみみく
- 肩に血のめぐりあみみくく足たるまよよ
- 慾身血のめぐりあみみくく腹のめぐりあみみく
- 積さうあみみくくむ糸やけあみみく
- 明月水達をみくく或は五月又の三三年の積水本末はよ
- 常に大便むけくく目まみくくあみみく
- さんくくくくくくくくくくくくくくくくくく
- 男女小兒の病をみくく物下の色あくく何となく
- 此丸をどうするものか 金使するものか

腕の其働に天晴気健る弱めり。是バ賺して引とる符の始末とゆ  
 てんものこ會釈るどふ甚太ハ焦燥て吾と侮マ鞠のまう會釈こそ尚奇怪  
 ので物又甘んと二声喚りり。嗚々狂ハ藏人も左右る渠と徒搏ふく雅く京  
 さう倍左ふ用た一上下と淨ふどり。鞠ふつひる下徳の房は彈とかくく引ど  
 離まど甚太まんく奮發しと申やくと引あハ景勢二龍の珠と欲まること  
 かる知小に遠る。樹林の裡より弦音高く。馬股の矢流来まつく強と下徳の  
 からまあハ間と丁と射切ら。必のがけわが藏人も甚太も俱ふ足まをて左右ふ  
 同さく遙る。樹頭を白眼く衝えより。此夫の主ハ什麼何めりぞ嗣集に  
 委く解分る



十杉傳卷之十五終



